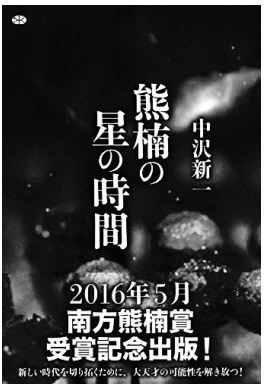
中沢新一

『熊楠の星の時間』

（講談社選書メチエ）

付録



南方熊楠賞受賞記念講演

粘菌と華厳

中沢新一

私と南方熊楠とのかかわりはとても古いのです。南方熊楠の名前を最初に知ったのは、中学生の時でした。私の父は民俗学の研究者で、書庫には柳田國男や折口信夫などの民俗学関係の本が並んでいました。私もよく書庫に入り込んで父親の蔵書を読んでいましたが、『南方熊楠随筆集』という本の著者の名前がどうしても読めません。しばらくしてそれが「ミナカタ・クマグス」だということを知りました。

熊楠の書物は、中学生にとっては難しい日本語で書かれていましたが、内容には大変興味をそそられました。私は子供の頃から神話や「未開民族」の習俗とかに関心が深かったからです。熊楠の人物にもたいへん惹かれました。ものすごい人がいたものだなと驚きました。明治時代、夏目漱石がイギ

南方熊楠邸にて

リス留学し、英語をしゃべるのが苦手なためにノイローゼになって下宿にこもっていたのとは大違いで、南方熊楠は英語を武器にして英国人を向こうに回して論争していました。科学雑誌『ネイチャー』に論文が何本も掲載されています。

一方で熊楠は、西洋の学問に比べると前近代的で、方法論的にも劣っていて科学性がないと言われてきた東洋の学問には、西洋の科学よりもこのさき科学そのものをもっと先に進めてゆくための重要なヒントが隠されていることを、直観していました。自分でも不思議に思うのですが、子供のころから私もまったく同じことを考えていました。私はもともと理科系でしたが、最先端のものも含めていまある科学にはなにかが足りないのではないかという漠然たる疑念を持ち続けていましたが、南方熊楠はそのことをもっとはっきりと哲学的に考えていました。

のちに、熊楠と土宜法竜（どきほうりゅう）の書簡集が出て、その中に「大乗仏教には大変な可能性がある。そこで大乗仏教の精神をいちばんよく残しているチベットへわしも出かけてみるつもりじゃ」というようなことを、熊楠が書いているのに出くわしました。これにはびっくりしました。それというのも、私自身が東洋の学問というものを一から勉強してみたい、そこでチベットの僧院で東洋の学問を勉強しようと考えたからです。熊楠の考えと自分の考えが完全に同調した瞬間でした。

＊　　＊

南方熊楠の研究領域は多岐にわたっていますけれども、思想的に重要な領域が大きく三つあるように思います。

一つ目は神話学です。神話は人類の哲学的思考の原初（ウル）をしめしていますが、あらゆる領域で原初的なものに関心を抱いていた熊楠は、神話を扱う人類学や民俗学に自然と関心を向けていきました。二つ目は生物学の領域です。この領域で、熊楠がとりわけ大きな関心を持ったのは粘菌という生物でした。粘菌をめぐる科学的な研究が熊楠にとってきわめて重要であることは当然です。ですがまた同時に粘菌という生物の存在形態が、熊楠にきわめて創造的な哲学的思考を促しています。このことについては後ほど詳しくお話しします。そして、三つ目が大乗仏教です。これは科学論文や哲学的な文章として発表されたものではありませんけれども、熊楠の思想の根底にはこの大乗仏教が据えられています。

この三つの領域は、深くつながりあっています。土台となる思想の構造が似通っているからです。似通っているどころか、同型性を持っています。熊楠はおどろくべき一貫性をもって、それら三つの領域の研究に突き進みました。この三つの領域のつながりを明らかにしていくと、先ほど言った、この先の科学の形態がどうなっていくのかということについ

て、大きな可能性を持った一つの見通しを得ることができるように思われます。

まず、神話のことからお話ししましょう。南方熊楠は、未開民族あるいは古代社会の神話や田舎の人々の習俗や思考などに深い関心を抱いていました。同時代に同じような問題に関心を持っていた巨人が二人います。柳田國男と折口信夫です。この三人は神話の領域に深い関心を持っていましたが、三人の取り組み方はまったく違っています。

熊楠は、有名なヨーロッパのシンデレラ譚をめぐる研究のなかで（「西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語」）、この物語が旧石器時代にまでさかのぼることをしめしています。竈と灰の少女シンデレラの物語と『酉陽雑俎』に載っていた古代中国の水辺の少女葉限の物語の構造が、同じであることを直感し、論証しています（詳細は中沢新一「南方熊楠のシントム」『熊楠の星の時間』。同『人類最古の哲学　カイエ・ソバージュ1』。いずれも講談社選書メチエ）。

シンデレラ物語は、大変古い起源をもっています。これはユーラシア大陸の西の端で発達しました。ユーラシア大陸の東の端で発達した、水辺を中間領域とする葉限とシンデレラが同じ根本神話の変形だと考えたとき、熊楠は人類がまだ東西に分かれていない旧石器時代の「根本神話」をとりだそうとしていたのだと思います。私は、南方熊楠のこの神話研究の方法に大変魅せられました。いま私は「アースダイバー」という仕事をやっていますけれども、これは南方熊楠の神話学の方法を現代的な形で展開しているという自負を持っています。歴史学や考古学の扱う資料だけでは明らかにされない、地殻やプレートの運動なども含めて、地球の運動全体と人間の思考がまじりあうところで展開されてくる、思考の深い地層まで人類の思想を掘り下げたいと思っているのです。

では生物学の領域で、熊楠はどういう思考を展開したか。熊楠は隠花植物の研究では、当時世界最先端の植物学者の一人でした。とりわけ粘菌学者としての熊楠は、世界の粘菌研究を若き日の昭和天皇といっしょにリードしていました。

熊楠は顕微鏡を覗くのがとても好きでした。死んだ生物を顕微鏡で覗いてみると、その死んだはずの体で微細な生命が動いているのが見えます。顕微鏡はこの世がさまざまなスケールでできていて、あるスケールでは死んでいるものが、別のスケールでは生きていることを、見せてくれます。個体の死と言われているものも、その奥には無数の生命体が生きている。それまで生きていた生命体の中にいた微細生物は、この個体が死ぬと、分解や発酵を通じて形態を変えて、別の生命活動を始めます。その意味では、生と死は渾然一体となって動いているのが世界の実相です。生死は相即相入の状態にあるのです。

こういう生命の実相を、誰よりもよく見せてくれるのが粘菌です。粘菌は生活環境がよいとアメーバになって、他の生物を捕食する動物として活動します。しかし生活環境が悪くなると、粘菌はアメーバであることをやめて動かなくなります。そして子実体を伸ばして、胞子を飛ばします。粘菌は植物としてふるまいます。熊楠は粘菌のしめすこの「中間性」に着目しました。生と死は分離できない、生死は相即相入している。熊楠はこういう粘菌を「生きた哲学概念」として立てることによって、生命の実相に迫ろうとしました。

科学者としての熊楠は、粘菌の実証的な観察と記述を徹底的におこないましたが、生命思想家としての熊楠は粘菌を「生きた哲学概念」として打ち立てます。科学的思考は平らな平面の上に乗せて、現象を記述します。ところが哲学は平面に垂直軸を立てて、高次元的な概念にします。すると、平面の上では生と死は矛盾しあい、互いを排除しあいますが、哲学的概念としての粘菌においては、生と死は共立するのです。

科学では、現象は因果関係で結ばれます。原因があって結果がある。原因となるものが同じ平面の上で変化していって結果に結び付く。こうして結果と原因は因果関係で結ばれます。ところが哲学的概念としての粘菌においては、生と死に排中律がなりたちませんから、このような単純な因果関係を考えることができません。粘菌のような生物を「生きた哲学概念」として生命の実相をとらえるならば、生死は相即相入しあっていて、生もなく死もなく、いわば「不生不滅」であることになります。

熊楠は「生きた哲学概念」としての粘菌が垣間見せてくれるものこそ、近代科学の思考を拡張したところにあらわれる、生命と世界の実相に適合する未来の科学の思考法である、と考えたのです。多くの日本の科学者たちが西洋に発達しつつあった科学の方法を無批判に信奉していた時代に、南方熊楠の思考は時代にはるかに先駆けて、その先を見つめていました。そして熊楠が見つめていたはるか遠方の地点に、人類は現在でもまだたどり着いていません。

＊　＊

そういう熊楠の思考のもっとも創造的な天才が、爆発的にあらわになった時期があります。そのことは研究論文や本の中ではなく、栂尾高山寺の真言僧である土宜法竜と交わした書簡の中に書きつけられています。

明治三十七年、熊楠はヨーロッパから帰朝してのちに故郷に戻り、準備を整えて那智の山に入って行きました。自分の生物学研究の主題を粘菌に据えた熊楠は、研究の拠点を那智の原生林に定めて、那智大社近くの旅館を宿に定めて、植物

採集に没頭するようになります。まったくの孤独でした。採集箱を抱えて山中を歩き回り、夜になると旅館に帰ってきて、灯火のもとで顕微鏡を覗き分類をおこない、標本を作るという作業が毎日続いていました。そんなとき、土宜法竜から手紙が送られてきたのです。土宜法竜は大変開明的なすぐれた真言僧で、十年ほど前ロンドンで熊楠の友達になりました。その手紙の中で、法竜は仏教の本質、人間性の本質について、おそろしく深遠な問題を熊楠に問いただします。それに対して熊楠が本気で答えます。その書簡の内容が、ものすごいのです。

この手紙の内容を読み解いていくと、熊楠がその実現を夢見、二十一世紀の私達がようやくその存在に気付き始めている新しい科学の方法が見えてきます。それは「ロゴス」とは異なる知性作用である「レンマ」に基礎づけられた科学です。西洋の科学はおもにロゴスに基礎づけられて発達しました。ロゴスは「ものごとを集めて、前に並べる」というのが、ギリシャ語での原義です。ものごとを集合させ、順序をつけて並べる、という意味ですが、これは現代の集合論という数学でもおおもととなる考えです。

ロゴスは言葉と深いつながりを持ちます。言葉は時間軸にそって単語を並べて、主語や述語の間にきちんとした結合のきまりがあり、それによってものごとを秩序だって表現することができます。それはロゴスの働き以外のなにものでもありません。そこで聖書にも「言（ロゴス）は神であった」と書かれるごとく、ものごとを正確に理解するということは、そのものごとについて正確な言葉で言う、と同じ意味だと、ギリシャ哲学では考えられました。西欧ではこのロゴスの知性作用をとても重視しました。キリスト教時代でもそうですし、近代科学の時代になってもロゴスこそが真理を表現できる能力を持つ、と考えられてきました。とくに近代科学では、ロゴスの持つ能力の幅はぐっと狭められて、形式論理としてのロジックが支配的になります。

熊楠はこのロゴスの知性作用だけでは、世界の実相を把握することはできない、と考えたのです。ロゴスは（1）同一律（2）矛盾律（3）排中律という三つの基本ルールによって働きます。このルールによって、ものごとを分離し、矛盾を排除し、概念の重なり合いを除去して、線形的な秩序をつくりやすくします。ところが生命の現実を観察すればするほど、このようなロゴスの通用しない現実があらわれてくることを、熊楠はよく知っていました。とりわけ粘菌のような生物では、同一律や矛盾律ばかりか、排中律さえ排除された生存形態をしめしています。生命の実相を理解するには、ロゴスを拡張した別の理性が必要であることを、熊楠は科学者としての経験を通じて、深く体験していたのです。

ところが仏教では、ロゴスを拡張したところに出現するこの別の理性についての深い探究がおこなわれていました。特に龍樹は『中論』や『中辺弁別』などで、この理性の働きを徹底的に追究しました。龍樹が取り出したもの、それはギリシャ哲学で「レンマ」と呼ばれた、ロゴスとは別の理性でした。このレンマの知性作用では、ロゴスの法則である同一律も矛盾律も排中律も取り除かれます。その結果、あらゆる事物が相即相入しあい、マンダラ状に関係しあう、縁起の世界があらわれてくるようになります。南方熊楠は仏教が発達させたこのレンマの知性をもってするとき、ロゴスの限界を突破することが可能である、と考えたのでした。

西洋ではロゴスを中心にした学問が発達しましたが、東洋ではレンマによる学問が発達しました。ロゴス的知性の中から、科学的思考が生まれてきましたが、レンマ的知性をさらに発達させることによって、生命の実相に肉薄できるより拡張されたかたちの「レンマ的科学」を作り出す可能性があります。熊楠はそういう「レンマ的科学」の創造を、那智の山中で夢見、構想したのでした。

このとき南方熊楠の参考書となったのが、『華厳経』という経典でした。『華厳経』は、数ある仏教経典の中でもっともサイエンス度の高い経典です。『華厳経』は菩薩の実践方法の説明から宇宙論までを包含した巨大な経典です。一貫したレンマの論理を土台にして、人生の意味から知性の解放された状態の説明にいたるまで、森羅万象が語られています。人間の知性の働きを宇宙の実相に近づけ一体化させていこうとする、東洋的学問（サイエンス）の古代における最高峰が、この経典にほかなりません。

明治三十七年の夏、土宜法竜からの質問に答えて、『華厳経』をひもときながら、そこから重要な概念を取り出し、それを現代化して哲学と科学の概念に改造する作業をはじめた熊楠は、彼の人生の中で最大の知的跳躍をおこなったのです。後にも先にも、南方熊楠の天才がこれほどの大跳躍を実現したことはありません。そしてそのとき熊楠が垣間見たのは、人類にとって今後も不易の光を放ち続けるほどの重大さをもった思想でした。

私たちには幸いにして、このとき熊楠の天才に閃いた思想のエッセンスが残されました。熊楠の抱いた着想を展開していくことによって、私たちは新しい科学、新しい学問を創造していくことが可能です。偉大な思想は最初の一歩だけが決定的です。熊楠はその一歩を確実に踏み出しました。その意味では南方熊楠は、まだ私たちの前方を歩んでいるのです。

じつにすばらしいことに、変人であった南方熊楠を田辺の人々は愛し続け、業績を讃える顕彰館まで建てられて、若い研究者たちがそこに集って、熊楠の業績をあらゆる方面から

研究しています。私は、その田辺が生んだ南方熊楠から大きな思想的影響を受けてきましたし、彼の思想の芽を大木に育てようと努力を重ねてきました。その努力はまだ過程にありますが、今日こうして南方熊楠の名前を冠した賞をいただいたことに、私はなによりの光栄を感じております。

（なかざわ・しんいち　人類学者・思想家）

（本稿は二〇一六年五月七日に行われた「南方熊楠賞受賞記念講演」をもとに再構成しました）

中沢新一『熊楠の星の時間』（講談社選書メチエ 630）
2016 年 6 月 20 日発行／講談社
〒 112-8001　東京都文京区音羽 2-12-21

非売品